

欠陥品の
文殊使いは
最強の
希少職でした。

kekkanhin no monjyutsukai wa saikyou no
kisyousyoku deshita

2

Toryuunotsuki

登龍乃月

Illustration

我美蘭

主な登場人物

Main Characters



クライシス

かつて世界を救った伝説の大魔導師。本名はクライスラー・ウインテッドボルト。フィガロの魔素の影響で若返った。

ドライゼン

ランチア守護王国の国王。家族想いで、強いカリスマ性を持つ。

ハインケル

裏組織アジダハーカの頭領。人狼の力を有し、灰色の狼男に変身する。

コブラ

フィガロが従えた裏組織トロイの参謀。冷静沈着だが、可愛い一面もある。

リッチ

二百年前に死亡しアンデッド化した青年。王都にある幽霊屋敷に住み続けている。

シャルル

ランチア守護王国の王女。刺客の襲撃に遭うも、フィガロに命を救われる。

フィガロ

本編の主人公。魔法が使えず勘当されたものの、クライシスのもとで秘められた力に目覚める。

クーガ

フィガロの力で変異した魔獣。高い知能と戦闘力を併せ持つ。

「シャルルヴィル王女様はどちらに！ ドライゼン王の勅命により、王女様の引き取りに参った次第！ 誰かあるか！」

アンデッドがランチア守護王国の王都を襲撃するという、未曾有の大事件が起きた翌日。

俺——フィガロはようやく戦いを終えて、王女シャルルが待つ歓楽街の店、トワイライトに戻って休もうとした。

しかしそのタイミングで、書状を携えた兵が一人、店先で大声を上げた。声量が大きすぎて、周囲に丸聞こえである。

いくら事件が終息したと言っても、シャルルを狙う輩が居なくなったワケじゃない。どこに潜んでいるかも分からないのに不用心すぎるだろう。

「はいはい！ ごめんなさい！ お迎えご苦労さまです！ あ！ タウルスじゃない！ 貴方も来てくれたのね！ ご苦労さま！」

「ほっほ。ご無事で何よりです」

シャルル専属の執事で、近衛でもあるタウルスが、燕尾服を着て馬車の横に控えている。

この人も柔和な顔をしているが、かなり強いという話だ。

出迎えたタウルスへ手を振り、兵の対応をするシャルル。口を開きかけた兵の唇くちびるに人差し指を押し当て、ウインクをして黙らせた。

それだけで兵の顔は赤く染まり、初めてキスをされた女子のように、手で唇を押さえていた。ま、シャルルは可愛いからな。当然の反応だと思っ。

「じゃあねみんな！ 今度王宮に遊びに来てよ？ 美味しいお菓子を用意するわ！」
「そりゃ無理な話だよ。一般市民がおいそれと王女に会いに行けたら苦労しないって」

店先で俺の横に控えていたコブラと握手をするシャルルに、俺は答えた。

闇組織アジダハーカのボス、ハインケルは悪の親玉だけあり、兵に面が割れている可能性もあるので、見送りに来ていない。アルピナも床に伏せているので、店先に出ているのは俺とコブラとトワイライトの従業員の皆さんだ。

「それもそうね。残念。さ、早くフィガロも乗って」

「えっ!? いやいや！ 俺は後で行くよ！ 色々とやらなきゃいけないこともあるし！」
停まっていた馬車に乗り込み、手を差し出してくるシャルルの誘いをやんわりと断った。

「分かったわ！ じゃあその時は、クーガに乗って来るといいわ。兵達にはクーガの姿形を伝えておく。大きな狼に乗った少年が来たら私とお父様に知らせるように、ってね。そうすれば面倒臭い手続きとかも無いはずよ！」

「えええ……マジかよ……」

「うん、大マジよ？ それじゃ待つてるからね！」

「ではフィガロ様、私もこれにて失礼いたします。この度は誠にありがとうございました」

朗ほがらかに言い切り、これ以上反論はさせないとばかりに、シャルルはさっさと馬車の扉を閉めてしまった。

タウルスは御者ぎよしゃの席に座り、手綱たづなをピシリと打つ。

それを合図として馬車はゆっくりと走り出し、蹄鉄ひでての音が遠ざかるのを聞きながら、俺は深くため息をついたのだった。

「行ったか？」

「はい」

「あの子、ホントに王女様だったのね」

扉の後ろに隠れていたハインケルが顔を出し、上位個体のヴァンパイアであるコルネットもつられて顔を出す。

「とりあえず俺達は帰るぜ。コルネットは俺の家で預かる事にした」

「分かりました」

片手をコルネットの上に置き、もう片方の手で自分の後頭部をガシガシと掻きながら、ハインケルが言った。

一応事件は終わりを迎えたが、行方不明のデビルジェネラルの動向が気がりである。

アエーシエマが減びた今、配下であるデビルジェネラルがどう出てくるのかが分からない。

「考えても分からないものは分からないし、とりあえずアルピナさんと話してからだな」

「アタシはもう平気よお？ トワイライトの子達がいるし、フィガロちゃんはフィガロちゃんややりたい事あるんでしょ？」

唐突に背後からアルピナの声があった。

振り向くと、従業員に肩を借りながら歩いてくるアルピナが居た。

「アルピナさん！ 動いて大丈夫なんですか!？」

「魔力プールマックスとは言えないけど、皆から魔力をもらったからね。ぐうたら寝てるわけにもいかないのよ」

「分かりました。でも決して無理はしないでくださいね」

俺の言葉に対し、弱々しくサムズアップで応えたアルピナは、地下へ向かっていった。

幽霊屋敷の地下にいた司祭を衛兵に引き渡したコブラから、衛兵達は数日の内に屋敷の調査に入るとの情報も聞いている。

あの屋敷にあった黒剣はアエーシエマと共に無くなってしまった。だが屋敷には呪いが掛かっているかも知れないので、捜査に入る衛兵達が少し心配だ。

先に入って色々調べるのもアリかな？

「そこら辺も、ドライゼン王と話す必要があるよな」

ボロボロになった自分の衣服を見つつ嘆息する。

ドライゼン王から顔を出せと厳命されているが、こんな格好では行くに行けない。

王宮へ向かうのは明日にしようと思う。

一国の王に謁見するのだ、小綺麗にしとかなないと駄目だろうしな。

それに昨日から夜通し動いていて一睡もしていないのだ。正直眠くて仕方が無い。

「もうひと踏ん張りして、ルシオさんの所に行こっかな。剣も出来てるだろうし」

ハインケルとコルネットを裏口から送り出し、軽めの昼食を取った後、タルタロス防具店に行くために、トワイライトの皆から服を借りようとしたのだが……。

「あの、どうしてこんなフリフリなんですかね？」

「だってフィガロちゃんのお顔かわゆいんだもん。どうせならメイクとかしちゃう？ 世界が変わるわよ？」

「私は一応男なので！ 化粧は結構です！」

「ほらほら！ このスカートなんて似合いそうじゃない？ 穿きましょ穿きましょ！」

「スカートなんて穿きませんって！ 普通の！ 普通のズボンとシャツは無いんですか！」

着せ替え人形で遊ぶような勢いで、様々な衣服を持ち寄るトワイライトの皆様。

その中にまともな服は一つもなかった。

これでもかと言わんばかりのフリフリが付いたワンピース、お尻がはみ出そうなぐらいギリギリ

の長さの短パン、大きな花柄のドレスシャツやボタンの付いていない真っ赤なワイシャツ……。男であり女であるこの人達の、ファッションセンスを疑わざるを得ない物ばかり出てくる。やっとこさネイビーブルーの長ズボンとミルク色の貫頭衣をゲットし、逃げるようにトワイライトを後にしたのだった。



結局なんかかんやあって街へ繰り出したのは夕方近く。

もうすぐ空が茜色に染まり始める頃だったが、街は活気で溢れていた。

「住人達に真実は知らされていないんだろな」

飲食店や屋台からはいい香りが漂い、無遠慮に俺の鼻腔に入り込んで来る。

先ほど軽めの昼食を取ったばかりだというのに、腹の虫がクルクルと鳴る。

歸りに何か買っていこうと心に決め、タルタロス防具店へと足を早める。

青果店や魚屋、肉屋の店先では、買い物に来た近所の奥様方が井戸端会議を開いている。

耳に入る会話から察するに、やはり昨日の出来事は徹底的に情報操作が行われているらしく、ア宁德ッドのアの字も出ていなかった。

やあね、やあね、と口癖のように繰り返す奥様方を横目に、タルタロス防具店の扉を開けてルシ

オを探した。

「こんにちは。昨日は大変でしたね。お元氣そうで何よりです」

武具の在庫確認をしていたのか、棚を見つつ手元の用紙に何か書き込んでいたルシオに声をかける。

「これはこれはフィガロさん、大変なのはお互い様です。そんな事より例の品物、出来ております。

あちらの部屋でお待ちください」

「本当ですか！ どんな剣なのかと胸を高鳴らせておりました」

爽やかな笑みを浮かべるルシオと軽く挨拶を交わし、取引部屋へと移動する。

提供されたお茶を飲みつつ部屋で待っていると、大きな桐箱を持ったルシオが現れた。

ショートソードだと聞いていたのだが……あの箱はノーマルソードぐらいの大きさはある。

ショートソードの場合だと、最長でも刃渡り六十センチぐらいが妥当なはずなんだが……。

「ルシオさん、これは……」

「ふふふ……」

怪しげな笑みを浮かべるルシオは、質問に答える代わりに箱をゆつくりと開ける。

箱の中にはファルシオンソードのような刀身をした白銀の剣が二振り納められていた。

「今回はフィガロさんから受け取ったインゴットを使い、新しい製法にて鍛造してみました。持つてみれば分かりますが、この剣は普通の剣じゃありません」

「でも、見た目はファルシオンですよね……あれ？ この溝は……？」

直刃の刀身で幅は十センチほど。刃は約八十センチ程度で僅かに弧を描いているのだが、刃の反対側の棟と呼ばれる部分が櫛のような鋸のような形状になっていて、溝部分は三センチほどの深さがある。

大きめの鍔が付き、柄はなめし革が編むように巻かれただけのシンプルな作りで、柄頭には正十二面体に加工された金属が使用されている。

「この溝は相手の剣やモンスターの爪などを受け止める事が可能です。大型の剣は難しいですが、大抵の剣であれば対処できます。溝に嵌まれば上に引き上げないと抜けませんので、相手のテンポロスも狙えますし、上手くやれば相手の武器を破壊する事も出来ます。作りに関してなのですが、いただいたブラチナミスリルは、新しい試みである積層打ちで何度も何度も伸ばしては折り重ねて叩き上げ、不純物を徹底的に追い出し、さらに通常の水焼きと呼ばれる工程を、特殊な油に漬け込む油焼きという、新しい方法に変更しております。油焼きをする事で柔軟性のある鋼組織が出来上がり、錆びや劣化、刃こぼれに強い性質を引き出します。加えて、叩き上げたブラチナミスリルを基に、二種の金属を薄く重ねて鍛造しました。これでミスリルの弱みである、硬さ不足もカバーしてあります。ああ、ちなみに二つの金属もミスリルに馴染みやすい種類を使用していますので、武器強化の魔法などもよく効果が出る事でしょう」

「な、なるほど……」

熱く語るルシオの説明を聞きながら剣を手取る。

柄を掴むと、手に吸着するかのようなフィット具合に軽く驚きを感じた。

だが驚くのはまだ早かった。持ち上げた瞬間に重みをほとんど感じないのだ。

この大きさであれば、少なくとも一キロから二キロほどの重さがあつて当然である。

剣は刀身の重みを利用した加速で叩き斬るのが普通で、重みがないというのは……。

「振ってみますか？」

「いいんですか？」

「構いません」

ルシオの言葉に甘えて部屋の隅へ行き、数度素振りをする。

剣ではあり得ない、小枝を振った時のような風を切る音がピュンピュンと鳴る。本当に軽い。

二本で一本分の重みと言っても過言ではない。

軽さに気を良くし、振る速度を少しずつ上げていくと、しばらくしてルシオからストップがかかった。

「ちょ！ ちょっとフィガロさん！ すごい……まさかこれ程とは」

そう呟くルシオの視線は剣ではなく部屋の反対側の壁に注がれており、つられて見てみると……。

「え……？ なんですかこれ」

その壁の一箇所だけに、ズタズタに斬り付けられたような跡が出来ている。

「真空刃……風撃衝……閃刃、などと呼ばれておりますが、超高速で振った武器から発する見えな
い斬撃、といった所です。ヴェイロン皇国の劍聖が使用したという話は聞いた事がありますが……
それ以外で確認された事象はありません。似たようなものに風魔法の【ウィンドカッター】があり
ますが……それとは速度も威力も段違い、劍聖の放つ斬撃は数メートル先の合金板をも叩き斬ると
言われています。フィガロさんの斬撃はそれほどの威力ではありませんが、いずれは劍聖と同じ頂
きに……」

「ほ、ほおん……」

壁に出来た傷痕を撫でながら感心したように話すルシオだが、俺の兄がその劍聖だとは夢にも思
わないだろうな。

稽古を受けていた時はそんな斬撃など食らった事は無いので、兄はやはり手加減していたのだな。
今の俺の体はマナアクセラレーションによって常時身体強化されている状態であり、振った劍は
規格外に軽い。二つの理由が合わさった事により、兄と似たような芸当が出来たのかも知れない。

「従来の劍は鍔しかり魔物の皮しかり、叩き斬る事をメインに鍛造されております。鋭さよりも頑
丈さに重きが置かれております。このような軽い劍は他に存在しない世界で唯一の劍でしょう。で
すが新しい試みにより頑丈さは折り紙付きです、どうかお納めください」

「ありがとうございます。大事にします！」

ルシオと固い握手を交わし、修理やメンテナンスなどの細かい説明を聞いた後、タルタロス防具
店を出た。
太陽はやや沈みかけており、空は綺麗な茜色に染まっている。
帰る途中に閉店間際の屋台で鳥の串焼きを一ダース買い、外出ついでにしばらく街の空気を感じ
たくなって、当てもなく街中をうろつく。
街は喧騒に溢れてはいるが、店じまいをする所が増えてきている。この後は仕事終わりの仲間と
卓を囲んで酒やらなんやらで楽しむのだろう。
歩きながら串焼きを三本ほど平らげた所で、ふと見覚えのある場所へ来ているのに気付いた。

「ここ……幽霊屋敷じゃないか……」

見れば屋敷の周りにはロープが張り巡らされており、立ち入り禁止の札が掛かっている。

門の前に衛兵が二人立っており、チラチラと屋敷の方へ目をやっている。

「あのー、すみません。ここって捜査が入るんですか？」

衛兵は全意識を屋敷へと向けていたらしく、声をかけると見た目でも分かるほどビクリと肩を震
わせて俺を見た。

「あ、ああ、そうだよ。なんでもこの屋敷の地下で凶悪な事件が起きたらしくてな、人体実験や邪
教のアジトだって話もある」

「へえ……衛兵さんは入ってないのですか？」

「俺達は警備担当だからな。現場検証は明日からだ。けどこんな薄気味悪い屋敷が事件現場だなん

て、検証担当じゃなくて良かったよ」

「ちげえねえ」

二人の衛兵がクックツツと笑い合うのを見てみると、ふと上からの視線に気付き、目だけをその方向に向けた。

屋敷の三階部分にある丸窓、そこに一瞬だが人の姿が見えた。開いてもいない丸窓に付いたカーテンが、ヒラヒラと動いている。

誰かいるのだろうか？

「どうした？」

「……いえ、何でもありません。お勤め頑張ってください、失礼します」

俺が違う所を見ている事に気付いた衛兵が、不思議そうに声をかけてきたのだが、それとなく話を終わらせた。薄暗い事もあり、きつと気のせいだろう。

街をうろつくのもいいが、ついでに剣の試し斬りをしようと思いついた。

その前に、冷めてしまったが城壁の外でのんびり景色を眺めながら串焼きを楽しもう。

日が沈む速度を考えると、急がなければ夜になってしまう。城壁の外は街道沿いにこそ点々とした明かりがあるが、それ以外は草原や林が広がっているため、夜になれば景色はほぼ漆黒に変わる。足を力を入れてジャンプし、並んでいる住居の壁を使い三角飛びをして屋根へと上がる。

「んー、風が気持ちいいねえ」

駆け足で屋根を伝い、頬を撫でる風の優しさに思わず深呼吸をする。

俺は黄昏時の、この何とも言えない空気がとても好きなのだ。

「こころ辺でいいかな」

城壁から離れる事一キロ地点の林に到着。剥き出しの岩に腰を下ろし、冷めてしまった串焼きを頬張る。

この串焼きは香辛料がたっぷり利いた、ランチア市民のソウルフードなのだ。屋台のおっちゃんに聞いた。鳥以外にも牛、豚、羊、ミンチ肉、魚、貝、野菜など様々な種類があったのだが、一番人気の鳥にしてみたのだ。

「うん！ 冷めてても美味しいや！ こりゃあと一ダースくらい買えば良かったかな」

あつという間に全ての串焼きを食べ切り、物足りなさを感じつつ、剣の桐箱を開く。

刀身は黄昏の光を浴びて怪しく煌めいている。

「名前、決めたいなあ……かっこいいやつ……軽いから……フェアリーソード……いやいや乙女か俺は……んー……」

剣を取っては置いて取っては置いてを繰り返し、剣から早く決めるよと突っ込まれそうぐらいに頭を抱えている。

自慢じゃないが、俺はネーミングセンスが壊滅的だと自負している。なんせクーガだって、腹を空かして牙を剥いていた狼だから空牙なのだ。



「あ」

ピーンと来た。

見えない斬撃を飛ばす剣、スーパーインビジブルスラッシュソードなんてどうだ？

……長いな……。

「振ってれば閃くだろ」

二振りの剣を持ち、構えを模索。

いい塩梅あんばいに立ち位置と構えが決まった所で、林の奥へ向かって強めに剣を振る。右、左、クロスさせて二撃同時。

キュン、キュン、と明らかに剣が鳴らさない音を鳴らして振り続ける。

林の奥はあまり光が届かないらしく、黄昏時だというのに暗くて全く見えない。

目に見える範囲の木の枝に向けて斬撃を放てば、音もなく枝は寸断されて地に落ちる。

これは高い木の手入れをする時に便利だな……。時折林の奥からドサリドサリと音がするが、奥の太い枝でも落ちたのだろうか。

そんな事を考えながら剣速を上げていく。

周囲の落ち葉が剣の風圧に吞まれて巻き上がる。

巻き上がった落ち葉をざっと確認し、切り落とす勢いで両手を振るう。

ひとしきり動いた後、大きく息を吐き出して背中に付けた鞆たもとに剣を収める。

「うん。いい感じだ」

額に浮かぶ汗を拭いながら地面を見る。

体捌きたいまきによる足跡が綺麗な円を描いている。

その周囲には、半分に割られた落ち葉が数十枚とそのままの姿の落ち葉が無数にある。

俺の実力ではこれぐらいが限界かな。あまり速く振りすぎると、遠心力で体が持っていかれそうになるのでそこは要練習だ。

やがて日は沈み、遠くに見える城壁に明かりが灯り始めたのを合図に、俺はその場を後にしたのだった。



翌日、服を新調し、お昼時の道を王宮に向けてテクテクと歩いていると、井戸端会議中の奥様方の声が聞こえてきた。

その内容はほとんどが近所付き合いの話だったり、物価の話や噂話だったりするのだが、チラホラと意外な話も混じっていたりするので、案外聞き逃せないものなのだ。

「やあね」「ほんとやあね」と、もはや一種の挨拶なのでは？ と疑いたくなるほど同じ言葉を繰り返す奥様方。

なんでも近所の林に、ゴブリンやトロールの屍しかばねがたくさん転がっていたらしい。

「兵士達は何してるのかしらねえ」

「ほんとねえ、やあねえ」

見つけたのは隣町から来た、駆け出しの冒険者パーティらしい。

冒険者達は自由の民だ。国に縛られない根無し草の放浪者。

この世界はとても広い。

未開の地が多数存在している事が、それを証明している。

スリルを求める者、迷宮ラビリンスを踏破しようとする者、遺跡に残された宝で一攫千金いつかせんせんを狙う者、秘境の

謎を解き明かしたい者。

人が冒険者になりたい理由は様々だ。国に守られていない分、国からの保護や恩恵はあまり受けられないし、常に命の危険と隣り合わせ。

しかしそれでも冒険者を目指す若者は多いのだ。

正直、俺も懂っていた時期がある。

旅をしながら世界中を見て回りたい、古代遺跡や世界的な遺産なども実際に見てみたい、と世界のガイドブックを見ながら幼心こころに思ったものだ。

当時は、魔法を使えない欠陥品の体を嘆いた事もあったが、今は違う。自分の足でどこへでも行けるし、危険に立ち向かう力も身に付けた。

「実力はまだまだだけどなー」

今度落ち着いたら皆に相談してみようか。

海にも行きたいし、山にも……山はいいや。有名な観光地は近い所だどこなのだろう？

「つとそうだ。クーガに乗って来いって言われてたんだ、出て来いクーガ」

王宮の手前にある巨大な跳ね橋に辿り着いた所で、シャルルの言葉を思い出してクーガを呼び出す。

俺の呼び掛けに応え、背後の影が立体的に膨らみ、中にいたクーガがゆつくりと出てきた。

『はいマスター！ どうしましたか！』

「ここからはクーガに乗って行く。ゆつくり歩いて行くんだぞ？ 走ったら皆びつくりするからな」

『御意っ！』

巨大な跳ね橋をテクテクと歩くクーガ。

クーガには鞍も何も付けていないため、両足でクーガの胴体を挟み、背中 of 体毛を手綱代わりにしている。

クーガは胸を張り、顎を引いて、馬のような足取りで進んでいく。

堀の水面が風に揺られ、周囲の木々が葉を擦り合わせる音が聞こえてきた。

軽く緊張している心が少しだけ軽くなる。自然の音にはリラクゼーション効果がある、というのは本当なのかも知れない。

「こんにちは、通っても大丈夫ですか？」

跳ね橋を渡り切った所にある衛兵の詰所へ顔を出し、挨拶をして一応許可を取る。

「ああ……あ、あなたは？ あ、いや！ 貴方がフィガ口様ですか？ お話は聞いております、どうぞお進みください」

「ありがとうございます」

事務仕事をしていただけと見られる衛兵はクーガに驚いたものの、ちゃんと話が通っているようで、すんなりと進む事が出来た。

視線を感じて振り向くと、詰所に居た衛兵が出てきて敬礼をしている。視線を前に向けても誰も居ない。

「やつぱりあの敬礼って俺に対してだよなあ……」

『マスターはすごい人ですからね。当然の行為であると私は思っていますよ』

詰所を過ぎ、門をくぐり、中庭へと通じる道を進む。

道は石畳で造られており、隙間をきちんと碎石で埋めていて、雑草の『ざ』の字も無い。

路肩を彩る鮮やかな花々は瑞々しく、蝶が舞っている。花々の隙間には害虫よけの効果があるハーブが植えてあり、そのハーブの香りも実に爽やかだ。

花から飛んできた黒と青の模様の蝶が、ひらひらとクーガの鼻に止まった。

蝶に気付いて歩みを止めたクーガは、鼻をスンスンと鳴らして蝶の匂いを嗅いでいる。

蝶の脚がくすぐったかったのか、大きなくしゃみを一つすると、蝶はどこかへと飛んで行ってしまった。

長閑な雰囲気を全身で味わっていると、王宮へ入る大きな扉が開き始めた。

扉が開き切ると、中から軽装の兵士達が出て来て二列に並び、一番最後に先日シャルルを迎えに来たタウルスが現れた。

兵士達もタウルスも、クーガの姿を見て目を丸くしている。

一応クーガは魔獣なのだが、兵士達には俺の使役する召喚獣だと認識されているつばいので、危険は無い。

でも二メートルを超える大きな狼がノシノシ歩いてくるのは、傍から見ても結構迫力がある。というか、絶対にクーガは成長したと思うのだ。

少なくとも全体的に一回りは大きくなっていると思う。魔獣としては小柄な部類に入るクーガだが、成長したとしてもおかしくは無い。

「お待ちしておりました、ファイガ口様。王様と王女様が首を長くしていращいますよ」

「こんにちはタウルスさん。出迎えありがとうございます。改めて緊張しますね、はは……」
クーガから降りてクーガを影の中へ戻す。

敬礼を続けている兵士達の間を抜け、タウルスに先導されるまま王宮へと入った。

背後からヒソヒソ声が聞こえてくる。

「あれがアンデッドの親玉を倒したって人か？」

「ファイガロという家名もない奴らしいぞ」

「大して強そうに見えないんだけど……」

「バカヤロ！ 殺されるぞ！ 俺は見ただ、親玉と肉弾戦で張り合うあの人をな！ お前が百人居ても勝てないぞ」

もう少し聞いていたかったが、タウルスがさっさと行ってしまおうので仕方なく諦めた。

タウルスの後に続き、玉座の間へ通された。

二度目の来訪になる玉座の間だが、二度目でも圧倒される荘厳さだ。

以前と違うのは、玉座へと続く赤絨毯の左右に、フルプレートフルプレートの甲冑かっちゅうを着けた兵士が向かい合っ
てずらりと並び、抜き放った剣を交互に合わせてアーチを作っている事だ。

「お進みください、ドライゼン王陛下とシャルルヴィル王女殿下がお待ちです」

タウルスに促され、一歩ずつ前へと進む。

飲み込んだ生唾のゴクリ、という音がやけに響く。

剣をイメージして背筋を伸ばし、顎を引き、拳を握り締めて進む。

玉座の周りには幹部達が並び、それ以外に他の兵とは違う甲冑を着けた騎士達、数十人の魔導師の姿も確認できる。

あれが宮廷魔導師様なのだろうか。確実に以前よりも人が多い。

前を見ると、玉座に座る二人の姿が目に入る。

二人とも微笑みを浮かべて待っている。

あれ……？ あの人は居ないのかな。

居てもおかしくない人物がこの場に居ない事を不思議に思っていた所……。

「待っておったぞうフィガロよ！」

「やつほー！ 昨日ぶりね！」

友人にでも語りかけるかのような砕けた口調で話す二人に少し驚きながら跪く。

「招致に応じ、不肖フィガロ、只今参上いたしました」

片膝をつき、左手を腰の後ろへ、右手を胸の前に当て四十五度の礼をする。

「そんな堅苦しく喋るでないぞ。なんだか他人行儀すぎる。もつと緩くてよいぞ？」

「そうよ？ お父様もこう言ってるんだし、リラックスリラックス」

「ええ……いいんですか……少なからず兵や幹部様など皆様方も居られますし……というかあの方はもう発たれたのですか？」

「誰の事だ？」

俺の質問に首を傾げるドライゼン王とシャルル。

「ベネリ様です。ドライゼン王の弟君であるあの方は……？ 一言お礼が言いたかったのですが」

「ベネリだと？ 奴は自領の田畑の拡大やら、伯爵家との共同事業やら何やらで忙しい。ここ半年

はそつちに従事しておる。今も自領でせかせかしてるよ」

「えっ？ でもアンデッド事件の際に、ベネリ様と名乗る方からシャルルが囚われている隠し部屋の事を教えてもらって……そのおかげでシャルルを助けられたんですが……」

ドライゼン王の頭上にはクエスチョンマークがたくさん浮かんでいる。なんだか話が噛み合っていない。

「ねえ、ベネリ叔父様のお姿は覚えてる？」

小首を傾げながらシャルルが言った。

「うん。白銀の甲冑を身に着けて……赤と金のオッドアイだったな。ハンサムな人だったよ。歳の割に若々しくて、綺麗な顔をしていたのが印象的だったな」

シャルルにそう答えた瞬間、周囲の空気が凍った気がした。ドライゼン王の表情には困惑、シャルルの表情には驚愕の色が出ていた。

「えと、あの……どうかされましたか？」

「ベネリは……白銀の甲冑など持ってはおらんし、目の色も茶色だ……そして頬には大きな傷がある」

「オッドアイって……まさか……」

今度は二人の言葉に俺が驚く番だった。

周囲に控えていた幹部達も驚きを隠せず、ヒソヒソと話をしている。

「じ、じゃあ私が見た方はどなたでしょうか……」

「いい？ フィガロ。現在、この王宮に仕えている人物でオッドアイを持つ者は一人も居ないわ。そして白銀の甲冑は、王宮の宝物庫で厳重な管理の下眠っているの」

「そして、オッドアイを持ち、白銀甲冑を身に着けていたのは過去ただ一人。流行病にかかり若くして亡くなった……スリーピングライオンハートと呼ばれた四百年前の賢王だけだ」

ドライゼン王の言葉を受けて、背筋にうすら寒いものが走った。

ちよつと意味が分からない。じゃあ何か？ 俺が見たのは幻？ というより亡霊？ 幽霊？ えっえっ何それ怖い。

確かにあの時、少し違和感を覚えたのは確かだ。

窓を割って入った直後、ベネリは俺の斜め後ろに立っていたのだ。

そう、俺と窓の間に、である。

あの時は急いでおり興奮状態にあったし、見つかったという事実にはパニックだった。

だが広い王宮の中、なぜシャルルがああ部屋に居ると知っていたのか、あの場所しかない、と断言できたのか。思い返せば不自然な点が幾つも出てくる。

冷や汗が浮き出てくるのを感じながら、王の語りに耳を傾ける。

「かの賢王は、よむひ齡二十五という若さで王位を継いだ。優しくも厳しい王だったという。戦時には猛る獅子のように兵を鼓舞し、前線で守護を務めたらしいのだ。だが……三十の齡にて、罹患すれば

必ず死ぬと言われた【せきふ赤腐】という流行病にかかり……隔離された部屋でその生涯を終えた。賢王の亡くなった部屋の前には、眠れる獅子像が置かれているのだよ」

「オッドアイっていうのはね、ランチアの家系では最強最硬と呼ばれる力の持ち主だけに発現する、伝説的な特徴の一つなの」

開いた口が塞がらないとはこの事だろうか。

何か言おうとしても喉が張り付いて声が出ない。

心臓が早鐘のような速度で鳴っている。

シャルルが連れ込まれたあの部屋は、四百年前の賢王が生涯を終えた場所だったという事だ。

「きつと……ご先祖様が助けてくださったのね……」

感極まったのか、シャルルは大粒の涙をポロポロと零している。

「そうかも知れんな……」

なんだか美談みたいに纏まりそうではあるが……完全なる部外者としては恐怖のハテナ状態である。

過去の亡霊が長い時を経て蘇ったりするのだろうか？ なぜあのタイミングで現れたのだろうか？

なぜ俺の事を知っていたのだろうか？ 色々考えると謎が尽きない。

少しだけ俺の中の探究心が刺激された瞬間だった。



玉座の間の一件から三十分後、食事を用意させるといふ話になり、客間で待っている間にクライシスへ連絡を取った。

数週間ぶりに魔道具のウイスパーリングを起動させる。

「お久しぶりですクライシス。元気ですか？」

「んお、久しぶりだなあ！ 随分楽しそうな事があつたみてーじゃん！」

「知ってたんですか!? なら何で手伝ってくれなかったんですか！ 大変だったんですよ！」

「基本的に俺は俗世と関わらねーんだよ。俺が出しやばつて事件を解決してみる。結局俺に、おんぶにだつこじやねえか。んなもん成長の障害だ。俺が関わるのは災厄級の何かが起きたり、大災害だつたりつー事案だけ。なるべく関わりたくは無いがね」

「ぐぬう……」

クライシスの言い分も一理ある。

だが、アンデッドの大群が押し寄せるのは大災害レベルじゃなからうか。

そう伝えると「そうかも知れない、だがあれはお前への試練だったのだ。決してめんどくさかつたからでは無い。交友関係を広げ、自分が何をすべきか、というのをだな？」と長い言い訳が始まっ

てしまった。

絶対にめんどくさかつただけだと思うが、確かに成長出来た部分もあるので微妙な反応になつてしまった。

「そんな事よりクライシス！ 亡霊は存在すると思いませんか？ アンデッドではなく、純粋な人の意思を持った霊体です」

御託を並べるクライシスを強引に遮り、一番聞きたい事をストレートに聞いてみた。

「んなもん居るに決まつてんだろ」

「ですよ。居ませんよね。って、えっ？ 居るの!？」

否定的な言葉が返ってくると思いきや、亡霊肯定の線で返答されたので一瞬戸惑ってしまった。

「居るよ。精霊や妖精と似て非なる存在だがな。基本的に人の魂や魔力は肉体から離れば魔素へと還元される。だが強い意思を持った魂、悔恨を残した魂は稀に現世へと留まる。ただその分類は精神生命体、霊体と呼ばれる種族へ変異し住処を霊質世界へと変える。低位の精霊や妖精はその霊質世界の一番上の部分にいるが、亡霊はそこに仲間入りをする。ちなみに上位精霊や幻獣なんかはもつと下の層にいるんだぜ？ 霊質世界つてのは複雑でな、大きな逆円錐のような構造をしてる。その一番上はこっち側、物質世界と紙一重なのさ」

「ほ、ほおん……：て事は、精霊や妖精と同じく亡霊も呼び出す事が可能なのですか？」

あまりよく分かっていないが、分かったフリをして話を促す。